

興福寺南大門の調査（平城第458次）

11月7日、興福寺では中金堂再建の地鎮祭が厳かに執りおこなわれました。享保2年（1717）の伽藍焼失から約300年。現在は寺観の復元・史跡地としての整備が進んでいます。南大門の発掘調査もその一環で、2009年7月中旬より調査を開始しました。調査面積は約780㎡です。

調査の結果、南大門の基壇は近代に大きく削られていましたが、礎石とその抜取穴から、門は桁行5間×梁行2間で、東西23.1m、南北9.0mに復元できます。礎石は花崗岩で、多くは抜き取られています。据え直しの形跡がないことから、創建時のものでしょう。また、基壇上では金剛力士像の台石を検出しました。西側のそれらは一辺約2.8mの穴の内側に切石を並べたもので、中世の基壇改修時に力士像の台石として転用したのでしょう。

基壇の縁辺では平安および室町時代の地覆石とその抜取溝を検出しました。平安時代の地覆石は基壇北辺と東北隅・東南隅に残り、同時期とみられる玉石敷も残存していました。一方、室町時代のそれは南階段の南辺に残るのみですが、その抜取溝が基壇の周囲をめぐっていました。なお、創建時の地覆石は遺存しませんが、その据付痕とみられる溝を複数箇所確認しました。

今回の調査でとくに印象深いのは、一般の方々からのご質問がとりわけ多かったことです。現地見学会では2,000名を超える方々にご来場いただき、たいへん盛況となりました。（都跡発掘調査部 森川 実）



南大門全景（東から）

薬師寺の調査（平城第457次）

薬師寺の東院堂（国宝、1285年創建）周辺に防災設備を設置するための幅約1.5m、延長50mにおよぶ逆L字形の調査区を設定しました。

薬師寺東院は吉備内親王が実母・元明天皇のために養老年間に創建したと言われています。東院堂は、南向きだったものを、1733年に現状のような西向きにしたという記録があり、さらに東院堂の柱間が天平尺を用いていることから、奈良時代に創建された御堂の礎石上に再建されたと考えられています。

そのような資料から、今回の調査は奈良時代創建の基壇跡を見つけるのが目的でした。そしてそれが見つかったのです。逆L字形の調査区で基壇西辺と南辺の凝灰岩製地覆石を発見しました。建物の西北隅部分にあたり、確認した基壇は東西8.2m、南北13.0mの規模があります。

基壇内部は砂礫や粘土が5～10cmごとに層をなして締め固められています。版築^{はんちく}という工法です。竊模様にみえるはずの版築ですが、ここでは各層同じような土質のせいか明瞭ではありません。版築の底部には、親指大の河原石を一部に敷き詰めていました。また、礎石を据え付けた痕跡を3ヶ所で確認し、礎石を安定させる根石もありました。礎石間の寸法は現東院堂を南向きにした場合とよく合います。

凝灰岩を用いた基壇と固い版築、丁寧な石敷きなどからみて、東院の創建時の中心建物でしょう。狙ってはいたものの、思いがけない発見ができました。

（都城発掘調査部 箱崎 和久）



版築と底部の敷石、礎石下の根石（西から）